

徳川吉宗治世期に来日した黄檗僧

松 浦 章*

Obaku Monk who Came to Japan During the Reign of Tokugawa Yoshimune

MATSUURA Akira

Abstract:

The monks who came to Japan from China in the early modern period were called Tang monks. The Tang monk Zhenyuan, who came to Nagasaki in the 6th year of the Yuanwa era (Ming Dynasty Taichang 1620), was the founder of three Tang temples built in Nagasaki: Dongmingshan Kofuku-ji, Bunshishan Fukujiji, and Seishuzhan Sofukuji. He became the founder of the Kofuku-ji Temple. These Kara Sankaji Temples were the religious bases of the owners and crews of the Kara ships that came to Nagasaki.

During the reign of Tokugawa Ietsuna, the fourth Shogun of the Edo period, a Zen temple was built as “Zetsa Ichiyu,” and in 1654, he invited some devoted monks from China. Osho Ingen was also invited. Ingen became the founder of the Obakuzan Manpuku-ji Temple in Uji, Kyoto. Subsequently, the Tang monks were invited and their legal system was adopted, but by the time of the reign of Tokugawa Yoshimune, the 8th Shogun, a many of the Tang monks stopped being invited.

Therefore, in this report, I would like to discuss the Tang ship owners who were involved in inviting the Tang monks during the Tokugawa Yoshimune era, as well as the problem of ceasing to invite them at some point.

Keywords: Edo period, Sankaji Temple, Nagasaki, Tang monk, Obaku sect,
Tang ship owner

キーワード：江戸時代 長崎三箇寺 唐僧 黄檗宗 唐船主

1 緒言

近世の日本に中国からの僧侶が渡来した最初の事例として元和六庚申年（泰昌元、1620）に遡る。この直後、長崎において東明山興福寺が建立され、一般に南京寺と呼称された。¹⁾ この興福寺に関して、『長

* 松浦章（MATSUURA Akira, 1947-）関西大学名誉教授

1) 古賀十二郎校訂『長崎志正編』長崎文庫刊行會、188-189頁。

『長崎實録大成』卷五、東明山興福寺の条に、唐僧の来日に関する事、当寺開創の事情等が次のように説明されている。

當寺開創ノ事ハ、元和六年唐僧眞圓當表ニ渡來リ三ケ年ノ間、今ノ興福寺境内ニ庵室ヲ結ヒ住居セリ。其頃邪宗門御制禁嚴厲ナリシ時節、日本渡海唐人ノ内、天主ヤソ教「原註：切支丹宗門也。」ヲ信敬スル者混シ來ルノ由風聞專ラナリシ故、南京方ノ船主共相議論シ、唐船入津ノ最初ニ天主教ヲ尊信セサルヤ否ノ事ヲ緊シク穿鑿ヲ遂ケ、且ツ海上往來平安ノ祈願、又ハ先主菩提供養ノ爲、右眞圓ヲ開基ノ住持トシテ禪院ヲ創建成シタキ旨、御奉行所ニ相願フノ處、免許有テ、東明山興福寺ヲ開創シ、諸船主共布施寄進縁銀、及ヒ香花料ヲ進呈シ、佛殿並船神媽祖堂ヲ造立シ、每船持渡ル處ノ佛神ノ像ヲ殘ラス寺内ニ持來シメ、住持眞圓ヲ始、寺中ニ役僧ヲ立置、委細可遂吟味ヲ旨、第一肝要ノ寺役ニ被仰付之。市中ニテ南京寺ト稱ス。²⁾

唐僧眞圓が来日し、後の興福寺となる「興福寺境内ニ庵室」を設けて住まいしていた頃に、日本が天主教すなわちキリスト教を禁制にしたのであった。そのため長崎に来航する唐船の乗員を、キリスト教徒であるか否かの宗教改めをする事になり、唐船船主等は、その煩雜を避けることと、長崎への来港船の船中において航海安全を祈願していた船神を、唐船長崎滞船中にその船神供養を寺院に委託する必要など³⁾ から唐寺が誕生することとなった。これが興福寺創建の大きな理由の一つであると共に、眞圓が興福寺の最初の住持となった。

『通航一覽』卷二百二十七、唐國部二十三、江蘇省蘇州府の「僧渡來住職」の条には次の様に編者の記述が見られる。

元和九癸亥年、南京の船主等先亡菩提、且乗組の内、耶蘇信仰の有無穿鑿のため、さきに渡來せし僧眞圓を「原註：江西省饒州府の人なり」住持とし、長崎に寺院開基を願ふ。御免ありて伊良林郷の内にて寺地を賜ひ、東明山興福寺を創建し、邪宗穿鑿寺役の肝要たるへき旨を命せらる、これを俗に南京寺と稱す。後如定・竺庵等、渡來して住職せり。⁴⁾

天正十五年（1588）に豊臣秀吉が南蛮寺を破壊⁵⁾ して以降、次代の徳川政権においてもキリスト教の禁令政策が堅持され、その後も厳格化された。そのキリスト教禁令下の日本に中国から長崎貿易に来航する船主等乗員が信仰する神々を庇護してくれる寺院が必要となり、元和九年（明・天啓3、1623）に東明山興福寺通称南京寺が、寛永五年（崇禎元、1628）には漳州からの船主等が支持した分紫山福濟寺が建てられた。⁶⁾ ついで寛永六年（崇禎2、1629）に福州からの船主等が支持した聖壽寺崇福寺が建立される。⁷⁾ これら長崎の三箇寺が唐僧の渡來拠点となっていた。

その後、長崎以外の地にも中国仏教の寺院が設けられる。『長崎實録大成』卷五、寺院開創之部、上、

2) 古賀十二郎校訂『長崎志正編』189頁。

3) 松浦章「江戸時代長崎来航の唐船と菩薩揚」、井上克人編『近代日中文化交渉の諸相』関西大学東西学術研究所研究叢書第4号、関西大学東西学術研究所、2017年3月、3-25頁。

4) 早川純三郎編『通航一覽』第6、国書刊行会、1913年11月初版、清文堂出版、1967年4月復刻、13頁。

5) 古賀十二郎校訂『長崎志正編』長崎文庫刊行會、1928年1月、251-252頁。

6) 古賀十二郎校訂『長崎志正編』205-206頁。

7) 古賀十二郎校訂『長崎志正編』209-210頁。

「黄檗山唐僧歴任之畧記」に、黄檗宗の僧侶の来日の事情が知られる。

嚴有院様御在世之時、承應元年、古昔足利家ノ例ニ準セラレ、日域ニ禪刹一宇、被創建、唐國ヨリ道德優良ノ僧ヲ可令住持旨、上意有之。當表興福寺ノ住持逸然方ヨリ唐國經山寺費隱和尚ノ法嗣、福州府黄檗山ノ住持隱元和尚方ニ請待ノ儀、再三申シ入。則許諾有テ、承應三年七月當表興福寺ニ到着有之。仍テ明曆元年城州宇治郡大和田ノ他ニ一寺開創有之。隱元和尚開基ノ初祖ニ被仰付、黄檗山萬福寺ト稱ス。此後、長崎三ヶ寺在住ノ内、徳義アル僧ヲ撰ヒ、代々可被令繼席旨被仰渡之。⁸⁾

「嚴有院様御在世之時」とは、江戸幕府第4代将軍徳川家綱（位：1651-1680）が将軍職に在位していた時のことである。徳川家綱の命は、「唐國ヨリ道德優良ノ僧ヲ可令住持旨」と中国から「道德優良」な僧侶を招聘し住持とするとのことであった。さらに来日し「長崎三ヶ寺在住ノ内、徳義アル僧ヲ撰ヒ、代々可被令繼席」と長崎三箇寺在住で「徳義」ある僧侶を選んで黄檗山萬福寺の繼席とする旨が決められた。

その家綱の実記である『嚴有院殿御實紀』巻八、承應三年（順治11、1654）八月朔日の条に、

けふ長崎奉行より唐土黄檗山現住の僧隱元、弘法のためとて去月五日渡海して到着せしよし注進す。⁹⁾と見られ、隱元が承應三年七月五日に長崎に来航したことが報告されている。ついで同書、承應三年九月五日条には、

唐僧隱元徒弟六人引つれ、長崎の地に來舶せるをもて、其さま問はせられしに、かの國の亂を避て歸化せるにまぎれなければとて、奉行よりその法語を進覽す。よて井伊掃部頭直孝、保科肥後守正之まうのぼり、林道治春信勝にこれをよましめ、御聞に備ふ。¹⁰⁾

とあるように、隱元の来日は、中国での政変の混乱を避けて渡海してきたもので、日本への帰化を申請していたとある。中国での政変の混乱とは明末清初の漢民族と満洲民族との抗争そのものであり、その際の政変を避けての渡日であった。

弘法のために来日した隱元が、日本での永住を希望していたと徳川実記に記録されている。その後も、隱元の法系に連なる中国僧が来日し、黄檗山萬福寺の繼席となり法系を継承した。その後、徳川家綱以降の第8代将軍徳川吉宗の治世期にも唐僧が招聘されている。とりわけ吉宗は、治世に必要な外国文化の受容を重視し、その一つが中国文化であった。¹¹⁾ このため唐僧の招聘もその一環と言えるが、この吉宗治世以降、唐僧の来日は途絶えてしまう。なぜ途絶えたかについて考えてみたい。

2 徳川吉宗時代の来日黄檗宗僧侶

徳川吉宗の治世期の享保年間に複数の唐僧すなわち中国僧侶が渡来している。その要因について『通航一覽』巻二百九、「僧渡來住職」には、

8) 古賀十二郎校訂『長崎志正編』長崎文庫刊行會、1928年1月、161-162頁。

9) 黑板勝美・國史大系編修會編『徳川實紀』第四編、吉川弘文館、1981年11月、119頁。

10) 黑板勝美・國史大系編修會編『徳川實紀』第四編、122頁。

11) 松浦章「徳川吉宗の中国嗜好と浙江総督李衛の探求」、二階堂善弘編『東アジアの思想・芸術と文化交渉』東西学術研究所研究叢書第13号、関西大学東西学術研究所、2023年3月、139-195頁。

享保十一丙午年、爲上意、宇治黄檗山に隠元嫡派の名僧を可被招請旨。按するに、次の書翰によるに、上意ありしは享保九年なり。¹²⁾

と記されているように、享保九年（1724）に徳川吉宗の命、宇治黄檗山萬福寺開祖の隠元の法系を絶やさぬようにとの事により、中国から名僧を招聘することになったのであった。そのために、

唐國三處に書翰を令相渡。¹³⁾

と、中国の三箇處に書翰を送っている。その三箇處とは福州の黄檗山萬福寺そして浙江省杭州にある靈隠寺と福嚴寺¹⁴⁾の三寺であり、三寺に対して日本への僧侶の招聘を要請したのであった。これには、長崎の唐寺三箇寺すなわち先に触れた崇福寺、興福寺、福濟寺が関与している。¹⁵⁾ その三箇寺から中国の三寺に送られた書翰「長崎三箇寺之唐僧添書翰」の写しが残されている。

大日本國西海道長崎鎮興福寺浄印、崇福寺照浩、福濟寺正猷等、謹奉書於大清國福州黄檗寺大方丈猊下、切浄印等同處中華、未曾親炙、今居海外有懷靡及、茲啓者、緣此日國山城州黄檗山萬福寺、高法祖上隠元國師開山、迄今相傳十有二代、皆係我唐僧東渡者、現住堂頭杲堂、法諱元杲、亦是近年東渡前往長崎興福、於壬寅冬奉命進住黄檗、舊例堂頭退席、皆由長崎三寺推補、於舊年新奉國命、向後黄檗補席必唐山、別請的是國師子孫曾經出世開堂、及才德並備學識優長者、茲命堂頭、備書儀寄舶商、致座下求訪、仍命印三寺、轉宣其意、伏冀座下會同兩席及耆舊諸大德、求訪果是國師嫡派孫曾已經開堂、並才優長爲法東渡者、先開其籍貫年歲、及履歷語録詩文寄來、另奉諸啓聘禮、先到長崎、隨住三寺、後進黄檗補席、伏乞座下留神、徧爲採訪、以副國命、俾轉重興黄檗佛法、不致凌遲、國師亦必含笑於大寂光中、又出於座下莫大之功、餘悉堂頭副啓、茲不復贅、臨穎主臣無任瞻注、不宣。

名具單肅 慶餘¹⁶⁾

とあり、その「和解」の一部を掲げれば以下のように見られる。

大日本國西海道長崎鎮興福寺浄印、崇福寺照浩、福濟寺正猷、謹て書を大清國福州黄檗寺大方丈座下に奉り候。然は浄印等、中華同く居候とも、終に御親み申候儀も無之候。只今海外に罷在候後は、御懐しく存候得共、不能其儀候、爰に啓上候は、此方日本國山城州黄檗山萬福寺事は、高法祖隠元國師開山にて、唯今まで相續十二代、皆唐國より東渡せし僧にても、唯今之堂頭杲堂法名元祀申候は、是又近年渡來られ候て、最初長崎興福寺に住職候處、壬寅冬、國命を奉受、黄檗に登山有之て、住職致され候。舊例之通にて候へ共、堂頭退隱候においては、皆長崎三箇寺より席を繼申事にて、去年新に國命を奉請候は、向後、黄檗繼席之儀は、唐國より別に正敷國師之兒孫之内、出生開堂候て、しかも才德兼備、學識勝候僧を請し可申との御事にて、爰に仰付有之候、上堂頭より、書札進物等を差添、唐船之商人へ言傳之、座下御尋求被下候様、頼入られ候。…¹⁷⁾

12) 早川純三郎編『通航一覽』第5、国書刊行会、1913年11月初版、清文堂出版、1967年4月復刻、364頁。

13) 『通航一覽』第5冊、364頁。

14) 『通航一覽』第5冊、368頁。

15) 『通航一覽』第5冊、368-369頁。

16) 『通航一覽』第5冊、368頁。

17) 『通航一覽』第5冊、368-369頁。

とある。長崎唐三箇寺の興福寺浄印、崇福寺照浩、福濟寺正覬三名の連名にて福建の福州黄檗山萬福寺へ、開祖隠元の法系に連なる僧侶の日本への渡来を招請したのであった。

それは「國命」すなわち時の將軍徳川吉宗からの命令であり、その使者として長崎に来航する唐船船主に依頼したのであった。先に渡来した杲堂は壬寅年冬すなわち享保七年（康熙61、1722）冬に國命によって、長崎から京都宇治の黄檗山に赴いたため、それに続く中国僧の渡来が必要であったのである。享保年間の渡来僧については、『通航一覽』の記述から抜粋すると以下の唐僧が知られる。

享保六辛丑年、僧杲堂渡来して長崎興福寺の住持となり、明年黄檗山萬福寺に移りて繼席となる。¹⁸⁾ [享保] 八癸卯年、竺庵又渡来し、興福寺の後住となり、後また黄檗山の繼席となる。同九甲辰年七月、萬福寺は隠元嫡派の唐僧選舉すへき旨、鈞命ありしにより、同十一丙午年、招請の事を、福州府の黄檗山ならびに杭州府の二箇寺に、杲堂より、各通の書簡を贈るにて、長崎の三箇寺 崇福寺、興福寺、福濟寺なり。よりも副簡して、五月歸唐の船頭、柯萬藏に托せしかは、明年福州府の仲祺和尚渡来すへきよしの返簡到來せり。萬福寺に書簡ならびに贈物等の入費を賜はりしか、同十六辛亥年にいたり、仲祺遷化のよしを申、是まで柯萬藏等、仲祺の事により偽計ありしかは、重ねての渡来をとどめらる。

此時浙江省杭州府の僧、鐵船渡来すへき返簡持渡り、願ひにより信牌を與へしかとも、猶船主等の偽りにや渡来もなく、信牌も返納せしかは、遂に唐僧渡来は止みたり。¹⁹⁾

また『長崎實録大成』卷十一、長崎入津竝雜事之部に見られる享保年間に中国から渡来した僧侶の記録は以下のようである。

享保四己亥年 六月何定扶船ヨリ唐僧道本渡海、崇福寺第六代ノ住持ト成ル。²⁰⁾

享保六辛丑年 唐僧杲堂渡海、興福寺第六代ノ住持ト成ル。²¹⁾

享保七壬寅年 唐僧伯珣渡海、以後崇福寺第三代ノ住持ト成ル。同仲瑛同時渡海。同寺ニ住ス。²²⁾
唐僧大鵬渡海、以後福濟寺第七代ノ住持ト成ル。²³⁾

享保八癸卯年 唐僧竺庵渡海、興福寺第七代ノ住持ト成ル。²⁴⁾

とある。これを長崎貿易の記録である『信牌方記録』から確認したい。

[享保四己亥年] 六月廿三日丘永泰・何定扶同船ニ而信牌無之入津仕候。…崇福寺住持之唐僧招請之儀請合申候而、此度連渡候。

道本 法諱 傳（中略）福州

…此度唐僧連渡候功も有之候ニ付、信牌を御與被遊候、七月七日積戻歸帆被仰付

『和漢寄文』三、『和漢寄文』、281-282頁。

18) 『通航一覽』第5冊、363頁。

19) 『通航一覽』第5冊、363-364頁。

20) 『長崎志正編』、393頁。

21) 『長崎志正編』、394頁。

22) 同書、395頁。

23) 同書、395頁。

24) 同書、396頁。

候。…²⁵⁾

道本は享保四年の六月二十三日に長崎に入港した船主丘永泰・何定扶船に搭乗して来日した。しかし丘永泰・何定扶船は長崎貿易の通商許可書である信牌を所持していなかったが、唐僧道本を連れ渡った功績で、新たに信牌を与えられている。ところが七月七日に長崎での貿易は認められず帰国した。そして丘永泰・何定扶船は再度八月七日に長崎に来航し、享保四年の27番寧波船となっている。²⁶⁾ おそらく七月七日に長崎から帰帆した積荷をそのまま再び来航したのであろう。

『信牌方記録』享保六年辛丑年の条に、

[七月] 十九日貳拾貳番尹心宜船入津仕候、此船より興福寺招請之唐僧連渡候。

杲堂 法名浄昶 年五十九歳 浙江嘉興府石門縣人²⁷⁾

とあるように、杲堂は享保六年七月十九日に長崎に入港した22番寧波船船主尹心宜の船に搭乗して来日した。²⁸⁾ 杲堂は浙江省嘉興府石門縣人で後に黄檗山萬福寺第12代繼席となった。²⁹⁾ ちなみに22番船主尹心宜は享保十一年二月十七日に長崎に午2番寧波船船主として来航し、同年六月十五日に帰帆している³⁰⁾が、帰国に際して尹心宜は、「黄檗山唐僧請待之書簡進物、福嚴寺、靈隱寺二ヶ寺へ持來可能仕由にて尹心宜請取之、歸唐仕候こと」³¹⁾と黄檗山へ招聘する僧侶に関する書簡並に献上品を杭州府の福嚴寺、靈隱寺二箇寺へ届けるように預かり帰国している。

伯珣と大成が来日したことは『崎港商説』卷三に、享保七年(1722)正月七日に長崎に入港した1番寧波船の本船主何定扶、脇船主丘永泰の報告に、

私共船之儀は、浙江之内寧波にて仕出し、唐人數四拾六人、外に御當地崇福寺より招請之唐僧貳人乗組候て、去年十二月廿五日に寧波致出帆渡海仕候處、…御當地崇福寺住持道本より唐僧貳人招請之儀式御願被申上、御許容被遊候に付、…福州鼓山湧泉寺におゐて相撰び候處に、卉木、大成と申兩僧は、則道本之法孫にて御座候に付、老年之随侍をも可仕由請合申候故、…去冬十二月廿五日、寧波より同船にて渡海仕候、元より卉木、大成之兩僧、清規を慎み守り、臨濟正宗にて、別派にて無之、尤も傳法をも不仕候段、…³²⁾

とあるように、道本の招請を受けて、道本が来日した際の唐船主何定扶が再度協力して道本の法孫である卉木、大成がこの時来日したのであった。

この二名の唐僧のことは『信牌方記録』享保七壬寅年条にも見られる。

正月七日壹番何定扶船入津仕候。此船より崇福寺招請之唐僧二人連渡候。

25) 大庭脩編著『享保時代の日中關係資料——近世日中交渉史料集二』関西大学出版部、1986年3月、40-41頁。以下『信牌方記録』と略す。

26) 大庭脩編著『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留守——近世日中交渉史料集一』関西大学東西学術研究所、1974年3月、72頁。以下『唐船進港回棹録』と略す。

27) 『信牌方記録』55頁。

28) 『唐船進港回棹録』75頁。

29) 黄檗宗布教師会編『黄檗宗大本山萬福寺歴代住持集』黄檗宗布教師会、2011年5月、20-21頁。

30) 『唐船進港回棹録』82頁。

31) 『信牌方記録』90頁。

32) 榎一雄編『華夷変態』下冊、東洋文庫、1959年3月、2927頁。

弁木 法名際潤 年二十八歳

大成 法名際脛 年十四歳³³⁾…（中略）…

とあり、『唐船進港回棹録』の割り注には、

進港ノ節度、唐僧二人弁木二十八歳、大成十四歳。今ノ伯珣と仲瑛是也。住崇福寺。³⁴⁾

とあるように、弁木二十八歳は後の萬福寺第20代繼席となった伯珣照浩であり、もう一人の僧、大成年十四歳は、後に黄檗山萬福寺第21代繼席となる大成照漢の来日時の記録である。

さらに享保七年（康熙61、1722）には、道徽こと萬福寺第15・18代繼席となった大鵬正鯨が来日している。その来日時のことが『崎港商説』巻三に見られる。享保七年七月二十一日に長崎に入港した14番寧波船の船主呉子明の報告に、

私共船之儀は、南京之内上海にて仕出し、唐人數四拾七人、外に御當地福濟寺より招請之唐僧壹人、都合四拾八人乗組候て、當月十七日上海致出帆、順風にて罷渡候に付、日本之何國へも船寄せ不申、直に今日致入津候。…然ば右唐僧乗せ渡り候儀は、御當地福濟寺住持全巖より、唐僧壹人招請之儀御願申上、御許容被遊候に付、福建泉州開元寺におゐて、道徽と申僧、招に應じ罷渡可申と申候はば、寺務を司らせ、追ては住職をも致させ申度由之書簡、去四月歸帆之節呉子明方へ請取、歸唐以後開元寺に尋参り、道徽へ致對談、則右之書簡相届け申候處に、此僧應じ招きに渡海可仕事由請合候に付、當三月に重て開元寺へ参り、右之僧致同道、上海迄罷越、此度連渡り申候、道徽事、泉州にて吟味仕事候處、元より清規を慎み守り、臨濟正宗にて、別派にて無之、尤傳法をも不仕僧にて御座候に付、乗せ渡り申候。³⁵⁾

とあるように、唐船主呉子明が唐僧を含め48人を乗り組んで上海から僅か5日で長崎に直航した。唐僧を連れ渡った理由として長崎福濟寺の全巖より唐僧の招請を受けて、泉州の開元寺の道徽を日本へ連れて来たのであった。

『信牌方記録』享保七壬寅年条には、道徽来日の記録が見られる。

七月廿一日拾四番呉子明船入津仕候、此船より福濟寺招請之唐僧を連渡候。

道徽 法名 其儼 年三十三歳³⁶⁾

とあり、『唐船進港回棹録』の割り注に、

唐僧一人來ル。道徽法名其儼、今ノ大鵬是也。住福濟寺。³⁷⁾

とある。

竺庵の来日事情について『華夷変態』卷三十七に、享保八年（雍正元、1723）七月十五日に長崎に入港した17番南京船の船主李淑若の報告に見られる。

私共船之儀は、南京之内上海にて仕出し、唐人數四拾一人、外に壹人、御當地興福寺より招請之唐僧壹人乗組候て、當月六日類船貳艘、私共船共に三艘、上海致出帆渡海仕候、右類船私共船前後入

33) 『信牌方記録』59頁。

34) 『唐船進港回棹録』76頁。

35) 榎一雄編『華夷変態』下冊、2941頁。

36) 『信牌方記録』59頁。

37) 『唐船進港回棹録』76頁。

津仕候、今度渡船之内、洋中相替儀無御座、日本之何國へも船寄せ不申、直に今日致入津候。…然ば右唐僧乗せ渡り候儀は、御當地興福寺果堂より、唐僧壹人招請之儀御願申候、御許容被遊候に付、果堂より竺菴と申僧へ書簡遣し候、其趣招きに應じ、御當地へ罷渡り候はば、興福寺之寺務を相勤させ、且衣鉢をも傳へ可申との書簡、去年在番南京船頭沈玉黨歸帆之節、言傳歸唐仕、去々年貳拾番船頭鍾觀天へ、右書簡相渡し候に付、則鍾觀天より竺菴へ相達し候處、書簡之趣致披見、招きに應じ、渡海可仕事由請合申候に付、今度李淑若船より鍾觀天と同船にて、竺菴渡海仕候、竺菴事は、鍾觀天兼てよく存罷有候に付、連に渡り申候。³⁸⁾

竺菴の来日は長崎の興福寺果堂からの招請によるものであった。この招請の書簡は、享保七年3番南京船の船主として二月五日に長崎に来航後、同年十月三日に帰国した沈玉堂³⁹⁾に託されたのであろう。しかし沈玉堂はその書簡を商い仲間の鍾觀天に委託し、鍾觀天が懇意の竺菴に渡し、竺菴が書簡内容を熟知して渡日を決め、鍾觀天が竺菴とともに李淑若の船で来日したのであろう。李淑若船が来日した、享保八年七月十五日より十日ほど前の七月五日に鍾觀天名義の信牌を所持した13番寧波船船主鍾觀揚船が来日している。⁴⁰⁾ 鍾觀揚は鍾觀天の兄であった。⁴¹⁾ 鍾觀揚は来日時に「無據用事に付渡海難成候に付、弟鍾觀揚右之信牌を受け、此度持渡候」⁴²⁾と報告している。このことから鍾觀天は、竺菴と共に李淑若船に同乗して来日したのであろう。ちなみに鍾觀天は、徳川吉宗が騎射に長けた人物や馬医者をも中国へ探訪し、その招聘に貢献した商人であり、後述の浙江総督李衛からも注視された人物であった。⁴³⁾

『信牌方記録』享保八癸卯年条に、萬福寺第13代繼席の竺庵浄印については次のように見える。

七月十五日拾七番李淑若船入津仕候、此船より興福寺招請之唐僧を連渡候。

竺庵 法號 萬宗 年二十八歳⁴⁴⁾

とあるように、竺庵は来日時には28歳であった。

このように、享保四年(1719)から八年(1723)にかけて、6名の唐僧が来日した。これら6名の唐僧の内、道本を除く5名は後に、京都宇治の黄檗山萬福寺の繼席となっている。杲堂が第12代、竺庵が第13代、大鵬が第15、18代に、伯珣が第20代、そして仲瑛は大成照漢として第21代の繼席となった。⁴⁵⁾ 享保四年に来日した道本寂伝は、福建福清縣の人で、伯珣、仲瑛こと大成の日本への招聘に尽力した。⁴⁶⁾

38) 榎一雄編『華夷変態』下冊、2980頁。

39) 『唐船進港回棹録』76頁。

40) 『唐船進港回棹録』78頁。

41) 榎一雄編『華夷変態』下冊、2975頁。

42) 同書、2975頁。

43) 松浦章「徳川吉宗の中国嗜好と浙江総督李衛の探求」、二階堂善弘編『東アジアの思想・芸術と文化交渉』東西学術研究所研究叢書第13号、関西大学東西学術研究所、2023年3月、156、178-179頁。

44) 『信牌方記録』68頁。

45) 黄檗宗布教師会編『黄檗宗大本山萬福寺歴代住持集』黄檗宗布教師会、2011年5月、20-21、22-23、24-25、29-30、30-31頁。

46) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』思文閣出版、1988年12月、265-266頁。

表1 徳川吉宗治世期に来日唐僧及び萬福寺繼席表

西暦	中国暦	日本暦	来日僧	唐僧請来唐船主	備考（道号・法諱）
1716	康熙55	享保元	靈源	高子旭 (元禄6年51番福州船)	崇福寺靈源 黄檗山第9代繼席（靈源海脈） 靈滅の来日は元禄6年（康熙32、1693） ⁴⁷⁾
1717	康熙56	享保2	旭如	程益凡 (正徳元6番寧波船)	黄檗山第10代繼席（旭如連訪） 旭如の来日は正徳元年（康熙50、1711） ⁴⁸⁾
1719	康熙58	享保4	道本	何定扶・丘永泰 (享保4年27番寧波船)	崇福寺第6代住持
1720	康熙59	享保5	獨文	程敏公 (元禄6年79番普陀山船)	福濟寺獨文 黄檗山第11代繼席（獨文方炳） 獨文の来日は元禄6年（康熙32、1693） ⁴⁹⁾
1721	康熙60	享保6	杲堂	尹心宜・沈撫篁 (享保6年22番寧波船)	興福寺第6代住持 黄檗山第12代繼席（杲堂元昶）
1722	康熙61	享保7	伯珣	何定扶・丘永泰 (享保7年1番寧波船)	卉木 法名際潤 年二十八歳 崇福寺第3代 住持 黄檗山第20代繼席（伯珣照浩）
1722	康熙61	享保7	仲瑛	何定扶・丘永泰 (享保7年1番寧波船)	大成 法名際腥 年十四歳 崇福寺在住 黄檗山第21代繼席（大成照漢）
1722	康熙61	享保7	大鵬	呉子明 (享保7年17番寧波船)	福濟寺第7代住持（道号：其儼 法諱：道徽） 黄檗山第15・18代繼席（大鵬正鯤）
1723	雍正元	享保8	竺庵	李淑若 (享保8年17番南京船)	興福寺第7代住持 黄檗山第13代繼席（竺庵浄印）
<p>道号・法諱は黄檗宗布教師会編『黄檗宗大本山萬福寺 歴代住持集』黄檗宗布教師会、2011年5月による。 ちなみに黄檗山第14代繼席（龍統元棟は生誕地：摂津大坂）、16第繼席（百癡元拙は生誕地：陸奥仙台）、第17代繼席（祖眼元明は生誕地：三河加茂郡）、第19第繼席（仙巖元嵩は生誕地：近江五個荘）及び第22代繼席（格宗浄超は生誕地：伊勢多気郡）以降の全ての生誕地は日本。享保期の唐僧来日は『信牌方記録』と『唐船進港回棹録』による。</p>					

このように、中国から隠元の渡来以来、黄檗山の法系は中国僧侶の来日によって継承されていた。吉宗もその方針を継承したのであった。

3 唐僧の来日を阻害した浙江總督李衛

このような日本における唐僧招聘の動きを清国側では看過していなかった。そのことを最も注視したのは浙江總督李衛であった。李衛の調査は執拗に行われ、享保十一年（1726）に、長崎から帰帆の際に、唐僧の招聘書簡を託された唐船主柯萬藏が追求の的となる。

「長崎紀事」によれば、長崎で唐僧の招聘を託されたのは唐船主柯萬藏であった。

享保十二丁未年、船主柯萬藏、按するに、前年書翰を附せし船主なり。福州府萬福寺仲祺和尚可渡來、返翰持來れり。⁵⁰⁾

享保十二年に長崎に来航した船主柯萬藏が、福州府萬福寺の仲祺和尚が渡來することを記した書翰を

47) 『長崎志正編』385頁。『華夷変態』中冊、1556-1558頁。

48) 『長崎志正編』388頁。『華夷変態』下冊、2687-2688頁。

49) 『長崎志正編』394頁。『華夷変態』中冊、1601-1604頁。

50) 『通航一覽』卷二百九、『通航一覽』第5冊、370頁。

もたらしたと見られる。この柯萬藏であるが、『唐船進港回棹録』によれば、

享保三年 8 番南京船 船主柯萬藏 二月廿一日進港 閏十月廿二日回棹⁵¹⁾

享保五年 25 番南京船 船主柯萬藏 六月廿六日進港 翌年四月十六日回棹⁵²⁾

享保八年 10 番南京船 船主柯萬藏 六月十六日進港 翌年閏四月二十日回棹⁵³⁾

享保十一年 1 番南京船 船主柯萬藏 二月初五日進港 三月十一日回棹⁵⁴⁾

享保十二年 31 番寧波船 船主朱孔音・薛卿音

九月十八日進港 享保十三年三月二十日「柯萬藏此船ヨリ歸唐」⁵⁵⁾

享保十四年 19 番南京船 船主何澤儒 柯萬藏代 十一月朔日進港 翌九月初八日回棹⁵⁶⁾

とあるように、柯萬藏は享保三年より同十一年まで八年間にわたり長崎に来航していた。

しかし柯萬藏は、享保三年以前にも長崎に来航していた『崎港商説』巻一に見られる享保三年二月二十一日に長崎に入港した際の報告では、

私共船之儀は、南京之内上海より仕出し、浙江之内寧波へ乗参、彼地關部より信牌を請取、唐人數四拾貳人乗組候て、當月十二日に寧波致出船、日本之地何國へも船寄せ不申、直に今日入津仕候、船頭柯萬藏儀者、五年以前三拾九番船より船頭仕罷渡り、…⁵⁷⁾

柯萬藏は正徳四甲午年（康熙53、1714）の午39番寧波船として長崎に来航していたことが知られる⁵⁸⁾が、信牌問題⁵⁹⁾が発生して、中国船主間の争いとなり、日本から発給された信牌が、江南海關と浙江海關の保管となっていたのであった。それを上海から出帆して浙海關におもむいて柯萬藏に給付された信牌を受け取り、長崎に来航して享保三年の8番南京船主として再来日したのであった。

その後、柯萬藏は唐僧招聘の書翰を預かることになる。『通航一覽』巻二百九に、

[享保] 十一丙午年、[唐僧] 招請の事を、福州府の黄檗山ならびに杭州府の二箇寺に、果堂より、各通の書簡を贈るにて、長崎の三箇寺「原註：崇福寺、興福寺、福濟寺なり。」よりも副簡して、五月歸唐の船頭、柯萬藏に托せしかは、明年福州府の仲祺和尚渡來すへきよしの返簡到來せり、萬福寺に書簡ならびに贈物等の入費を賜はりしか、同十六辛亥年にいたり、仲祺遷化のよしを申、是まで柯萬藏等、仲祺の事により偽計ありしかは、重ねての渡來をとどめらる。⁶⁰⁾

『唐船進港回棹録』によれば、柯萬藏は享保十一年三月十一日に長崎から帰帆した。この際に、唐僧仲祺の招請を求めた書翰が彼に託されたのであった。しかし仲祺の遷化によって、唐僧招請は実現しなかったものであった。

51) 『唐船進港回棹録』 69頁。

52) 同書、73頁。

53) 同書、78頁。

54) 同書、82頁。

55) 同書、86頁。

56) 同書、88頁。

57) 榎一雄編『華夷変態』下冊、東洋文庫、1959年3月、2789頁。

58) 『信牌方記録』 14頁。

59) 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007年7月、98-121頁。

60) 『通航一覽』第5冊、363-364頁。

浙江総督李衛は、柯萬藏の商い仲間である魏徳卿について追求している。

浙江総督管巡撫事の李衛の雍正六年九月二十五日付の奏摺によれば、

近復訪得、倭孛着閩商魏徳卿、欲請福清縣黄栢寺方丈僧人前往、約在九月終、到普陀下船、以爲料無人知。⁶¹⁾

とある。李衛が探索していた福建商人の魏徳卿が、福建福清縣にある黄栢寺すなわち黄檗寺のことであるが、その寺の僧侶を日本への渡航に関与していたのであった。この魏徳卿は、長崎貿易の記録では享保三年（康熙57、1718）三月五日に長崎に入港した13番南京船の船主として最初の来日であった。しかし父親の魏岳臨も長崎貿易に関係していた。⁶²⁾ 魏徳卿はまた享保五年12番船の船主であった。⁶³⁾

雍正六年（享保13、1728）十一月初三日付の浙江総督管巡撫事の李衛の奏摺によると、

…竊臣前差弁員赴普陀等候、福建奸商魏徳卿所托夥計柯萬藏聘請僧人私往東洋一事、今於十月十八日、據臣撫標千総王國材外、委把総李成基、協同定海鎮標把総何有嬌、果然全獲解到柯萬藏并僧人璧峰等九人、稱伊等委系自閩省由内地行走、於十月初九日來到寧波、改換姓名、假稱普陀進香、初十日、由鎮海關出口。被李成基尾隨、其後至普陀會合、何有嬌拿往、伊等柯萬藏無可掩飾、即許銀一百兩立票、至蘇州魏徳卿處、支取欲求放脫、該弁不敢隱瞞連票責解。臣親加訊問柯萬藏乃魏徳卿夥計、璧峰系福清縣黄栢寺僧人、仲祺法戒之徒、日本向有福建寺一座、聘請中原和尚居住、稱爲唐僧揆厥所由、無非蠱惑伊國人民、使其心服將軍、恐嚇無知之。故如蒙古之供奉喇嘛相似。原欲指定要仲祺帶領徒衆前往、因伊夏月病歿。今故招聘其付法門人等類。…⁶⁴⁾

とあるように、魏徳卿の夥計であった柯萬藏が僧侶の日本への渡航に関与していたとされた。柯萬藏と僧人璧峰等九人が福建省より浙江省へ「内地行走」と内陸部を移動して、十月初九日に寧波へ到着した。そこで姓名を替えて、普陀山へのお参りと称して、初十日に鎮海關から出帆したが、把総の李成基の追尾に遭い、普陀山で定海鎮標把総の何有嬌に拿捕されたのであった。柯萬藏に協力した璧峰は福清縣黄栢寺の僧侶であり、仲祺の弟子であった。日本の福建系の寺より中国の僧侶の招請を受け日本へ赴くところであったが、仲祺は雍正六年（享保13、1728）夏月に病歿したとのことであった。

李衛の奏摺によって、柯萬藏が捕縛された上に、また仲祺が遷化したことは日本へも伝えられていた。このことを裏付ける記録として『長崎實録大成』巻五、東明山興福寺の条に次のように記録されている。

[享保]十四年入津ノ船風説ニ、去年仲祺僧徒共ニ普陀山川口マテ連出ル處、改役人搜シ出シ、柯萬藏ハ入牢、僧徒ハ本山ニ令歸ラルル由。翌十五年鄭恒鳴渡來リ仲祺ハ先達テ遷化ノ由。外ノ僧徒可渡ノ勅許ヲ蒙シ由。又同十六年魏弘丹、仲祺渡海ノ事官府表相濟ニ付、僧衆自宅ニ養置ノ由。又同年鄭恒鳴渡來リ、仲祺遷化ノ事實説ノ由申出ル。段々被御詮議ノ處、是迄數人ノ唐人自分ノ利欲ヲ貪リ種々偽計ヲ巧ミシ由令露顯ニ付、柯萬藏、魏弘丹、渡海禁制被仰付、此事廢亡セリ。⁶⁵⁾

長崎の唐寺東明山興福寺では唐僧仲祺の招聘を企図するが、仲祺が普陀山沿海まで至ったところで清

61) 『宮中雍正朝奏摺』第11冊、國立故宮博物院、1978年9月、411頁。

62) 『華夷変態』東洋文庫、1959年3月、2795頁。

63) 『唐船進港回棹録』69、73頁。

64) 『宮中雍正朝奏摺』第11冊、674頁。

65) 『長崎志正編』191-192頁。『通航一覽』第5冊、371頁。

国官憲に見つかり本山まで帰された。唐僧の渡航に関与した柯萬臧は逮捕され入牢となった。そしてその仲祺が遷化したことを鄭恒鳴が享保十五年（雍正8、1730）に来航して伝えたとある。鄭恒鳴は重要な情報を知り日本側に伝えている。

柯萬臧が唐僧の招聘に関係していたことは、『信牌方記録』享保十一年（雍正4、1726）の記述に、宇治黄檗山住職から中国僧侶の要請を求められ、中国の寺に書簡を届けることになり、享保十一年の1番船の柯萬臧と2番船の尹心宜に依頼された。柯萬臧は宇治黄檗山の元昶の書簡と進物そして長崎の三ヶ寺よりの書簡を福州府の黄檗山へ届けること、そして尹心宜は杭州府福巖寺と靈隠寺へ書簡を送るとのことであった。⁶⁶⁾

中国から僧侶を招請することになったのは、承應三年（順治11、1654）に渡来し、徳川幕府から現在の京都府宇治に黄檗山萬福寺を開いた隠元隆琦が開山祖となった後の第12代杲堂元昶⁶⁷⁾が長崎の三ヶ寺に僧侶の招請を委託したのであった。杲堂元昶からの書簡の写しが『和漢寄文』三に記録されている。

唐僧招待之儀式ニ付、黄檗萬福寺より長崎三ヶ寺に差越候書翰寫。⁶⁸⁾

として見え、文中に、

〔元〕昶在唐山日、不與我國師兒孫相識也。以故寓書於清國三寺、代選其人也。⁶⁹⁾

と、元昶は國師すなわち隠元隆琦の兒孫について知る僧侶が居ないために、清国の寺に相応しい人物を要請したものであった。この書簡の写しには年月日は見られないが、長崎の崇福寺伯珣、興福竺巖、福濟寺大鵬⁷⁰⁾の連名宛に書かれたものである。長崎の三箇寺の崇福寺の伯珣は「享保七年渡来、同九年ヨリ在住廿七年」⁷¹⁾とあり享保七年に来日して三十年近く滞在した。興福寺は竺巖とあるが竺庵であろう。竺庵は、「享保八年渡来、住十二年、同十九年黄檗山第十三世席トナル」⁷²⁾であり、福濟寺の大鵬は「享保七年渡来、同九年ヨリ在住廿二年。延享元年黄檗山第十五世繼席ト成ル」⁷³⁾と、三人共に享保七（康熙61、1722）、八年（雍正元、1723）に来日している。『唐船進港回棹録』によれば、享保七年正月初七日に長崎に入港した1番寧波船何定扶・丘永泰船に「進港ノ節、唐僧二人來、弁本二十八歳、大成十四歳。今ノ伯珣、仲瑛是也。住崇福寺」⁷⁴⁾とあり、確かに伯珣は二十八歳で享保七年正月七日に来日した。大鵬は同年七月二十一日に入港した14番寧波船船主呉子明の船で「唐僧一人來ル。道徽法名其儼、今ノ大鵬是也。住福濟寺」⁷⁵⁾とある。竺庵は享保八年七月十五日に長崎に入港した17番南京船船主李淑若の船で来日し「此船ヨリ唐僧一人來ル。竺庵歳二十八、住興福寺」⁷⁶⁾とある。

66) 『信牌方記録』87、89頁。

67) 黄檗宗布教師会編『黄檗宗大本山萬福寺歴代住持集』黄檗宗布教師会、2011年5月、20-21頁。

68) 『和漢寄文』三、『和漢寄文』、273頁。

69) 『和漢寄文』三、『和漢寄文』、273頁。

70) 『和漢寄文』三、『和漢寄文』、274頁。

71) 『長崎志正編』、212頁。

72) 同書、193頁。

73) 同書、208頁。

74) 『唐船進港回棹録』76頁。

75) 『唐船進港回棹録』76頁。

76) 『唐船進港回棹録』78頁。

これらのことから柯萬藏が唐僧の招請に関与していたことは確実であった。柯萬藏は享保十三年（雍正6、1728）三月二十日に「柯萬藏此船ヨリ歸唐」⁷⁷⁾とあるように、帰国し仲祺の來日を準備したが、清官憲に拿捕され入牢となり、また仲祺も遷化したため、仲祺の來日は実現しなかったのであった。

柯萬藏以外にも、唐僧の來日に協力した中国商人が知られる。何定扶は、享保四年の道本、享保七年の萬福寺第20代繼席の伯珣照浩と第21代大成照漢と3名の唐僧の來日に尽力し、呉子明は同年の萬福寺第15・18代繼席となった大鵬正鯨を、李淑若は享保八年に來日し、萬福寺第13代竺庵淨印の來日に尽力した。

4 結語

上記のように徳川吉宗時代の享保四年（康熙58、1719）から八年（雍正元、1723）にかけて、6名の唐僧が來日した。この6名の唐僧の内、道本を除く5名は後に、京都宇治の黄檗山萬福寺の繼席となっている。杲堂が第12代、竺庵が第13代、大鵬が第15、18代に、伯珣が第20代、そして仲瑛は大成照漢として第21代の繼席となった。⁷⁸⁾ 享保四年に來日した福建福清縣の人であった道本寂伝は、黄檗萬福寺の繼席とはならなかったが、伯珣、仲瑛こと大成の日本への招聘に尽力したのであった。⁷⁹⁾

そしてこれら唐僧の來日に際して、いずれの僧侶も長崎に來航していた唐船主の協力を得ていたのであった。その唐船主の日本からの要請に応えるために齷齪する様が、浙江総督李衛の注視を喚起したのである。⁸⁰⁾ そのため仲祺の來日が困難となり、以降の唐僧來日が途絶えてしまうのである。

唐僧隱元が徒弟等を引つれて來日し、宇治黄檗山萬福寺を開基して以来、その後も10余名の中国僧侶が來日し、萬福寺の法統を継承してきた。しかし徳川吉宗時代に來日した中国僧以降、中国官憲の監視が厳しくなり、黄檗宗の僧侶の來日が途絶えてしまったのであった。とくに唐僧の來日を途絶える契機となったのは浙江総督李衛の厳しい探求であった。

77) 『唐船進港回棹録』86頁。

78) 黄檗宗布教師会編『黄檗宗大本山萬福寺歴代住持集』黄檗宗布教師会、2011年5月、20-21、22-23、24-25、29-30、30-31頁。

79) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』思文閣出版、1988年12月、265-266頁。

80) 松浦章「徳川吉宗の中国嗜好と浙江総督李衛の探求」、二階堂善弘編『東アジアの思想・芸術と文化交渉』東西学術研究所研究叢書第13号、170-194頁。

